

スリランカ探訪

大脇澄男

1 はじめに

2011年9月6日から9月14日にかけてスリランカ・タイを訪問した。タイ（バンコク）はスリランカからの帰途、友人に会うための短日間の滞在なので、スリランカを中心に報告し、バンコクについては旅の追補とした。スリランカ訪問の動機は、留学生の中にスリランカ出身の学生が想像以上に多いことである。私は2009年に、友人の橋本氏（本学OB）と二人で、スリランカ出身の学生に集まってもらって、夕食を共にしながらの意見交換会を催したことがある。その時、この国をいずれ訪問してみようと思った。その後、何と言う雑誌か忘れたが、女性の手によるスリランカの旅日記を読んで、安全生にそれほど問題がないことを知った。その後も、新聞等でスリランカ情勢をウオッチしていたが、今年に入って、スリランカ政府が内線の鎮圧に成功したとの情報を得た。スリランカ訪問の機会が到来したと思った。

2 スリランカ概観

スリランカは九州（42,178km²）より少し大きくて、北海道（83,456km²）より少し小さい程度（66,000km²）のインド洋に浮かぶ小国である。1970年代の後半から多数派のシンハラ人（仏教徒）と少数派のタミル人（ヒンズー教徒）との間で内紛が続いており、経済は疲弊し人々の暮らしは決して楽ではない（ただし、内戦状態は昨年末に完全に集結した）。他方、驚くことに、この小さな国に世界遺産が7箇所も存在する。総人口は2000万人程度で、その内の200万人が首都コロomboに住むが、第二の都市キャンデの人口は6万5000人程度で、ほとんどの国民は地方の町や村に分散して生活している。国立大学は16校で、進学率は同年齢人口の10%程度である。コロombo大学が東大なら、キャンディにあるペラディニア大学はさしずめ京大ということになる。工学系ではペラディニア大学の方が人気が高いようである。日本との関係は極めて良好である。戦中、日本軍がコロomboを空爆するという歴史にも関わらず、賠償請求権を放棄し、日本の戦後復興を後押ししてくれた友好国である。最近の事としては、スマトラ沖大地震（2008年12月26日発生）によって発生した大津波による大災害に対する復興支援がある。災害復興における日本の貢献について広く国民に知られており、日本に対して感謝の念を持っている。

3 空港からホテルへ

コロンボ国際空港には夜中の零時15分に到着した。ホテルは旅行社で手配していたが、ホテルまでの足は本学OBであるアジット氏の奥様（ナヤナさん）のお兄さん（ラウナッツ氏）が迎えに来てくれることになっていた。奥様のナヤナさんとは非常勤先で偶然に出会った間柄である。ナヤナさんは信州大学を卒業してから、学位を取るために岐阜大学の博士課程に在席しており、私と同じ非常勤先で英語の非常勤講師をしていた。たまたま帰り道が同じ方向であり、彼女が車を持っていなかったこともあり、しばしば私の車で自宅まで送り届けたりしていた。彼女のお兄さんは山口大学で電子工学の学位を取ったお人である。妹がお世話になったことに加えて日本語が堪能と言うことで、私の出迎えを買って出してくれたという訳である。コロンボ国際空港からコロンボ市内まではかなりの距離がある。ようやくホテルに到着して、受付で名前を告げたところ、私の予約が見当たらず一悶着になった。ラウナッツさんが掛け合ってくれて、何とかその晩はベッドの上で寝ることができた。私は旅の自由度を大きくするためにホテルを決めないで出かけることが多い。今回の旅行では深夜の到着なので安全を期して到着した日と翌日分だけはホテルを予約していた（つもり）。それも、出発間際まで二転三転させていたため、途中で私の予約情報が混線したようだった。それにしても、後から分かったことだが、ホテルからラウナッツさんの家までは100km近くもあり、途中には急峻な山道もある。とんでもないことをお願いしていたと知って、非常に申し訳なく思った。

4 コロンボ市内

翌日、早速、人の良さそうなドライバーを選んで名物のスリーウィーラー（三輪車：オートリクシャー、トゥクトゥクとも呼ぶ）をチャーター、市内探索に出かけた。コロンボは言うまでもなくスリランカ最大の街である。1985年にコロンボの東方約10km離れたディヤワンナオヤ湖のそばに新首都が建設されるまではスリランカの首都であった。残念ながら私は訪れなかったが、聞くところによると新首都はまったく活気のないところらしい。それはともかく、東西交易の要衝の地として、ポルトガル、オランダ、イギリスと宗主国を替えながら長い間植民地支配されてきたこの国は、皮肉なことに東南アジア諸国の中で、どこの国とも違う独特の雰囲気醸し出し、それが今となっては貴重な観光資源となっている。そう言えば、投宿したホテルのロビーの観光案内に SriLanka Like Noland と書いてあったのを思い出した。

いつものことながら、私の興味や関心の対象は、人々の生活や交通事情と大学にある。早速コロンボ大学 (University of Colombo) を突撃訪問した。しかし、守衛に阻止されてしまった。アポなしではまったく埒があかなかった。私の身分と来意を告げて何とか食い下がったが中へ入れてもらうことができなかった。



図1 市内は平穏。後方の高いビルはヒルトンH。



図2 コロンボ市内。車の99%が日本車。

<ヒッカドウワ訪問>

予定を変更して、コロンボから汽車で2時間半余りの所にある、スリランカで一番人気のあるビーチリゾート、ヒッカドウワを訪れることにした。ここにはかつてヌーディストビーチがあったらしい。コロンボ大学を見学できなかった腹いせに水着の美女を見に行こうということではない。ここは、先の、スマトラ沖を震源とする大津波で被害を受けたところである。私の次男が災害情報を配信する会社に勤めている関係で、何か報告できることはないか、訪れることにしたのだ。目的地までの汽車の車窓からは長い海岸線が見える。海岸線に沿って立ち並ぶ民家のそこかしこに、漂流物が付着したり散乱したりしていて津波被害のあったことが窺える。とは言え、人々はすっかり日常の生活を取り戻しているように感じた。

途中の駅から、鉄の棒などの道具を抱えた工夫が乗り込んできた。車中の人の話から、どうやら途中で線路が中断しているらしいと分かった。案の定、途中でバスに乗り換えることになった。乗り換え時、客を待ち構えていたリキシャのドライバー同士で私を奪い合いになり、二人の仲が険悪になったのには驚いた。結局、年嵩の方が折れて一件落着となったが、なんだか納得がいかない思いがした。と言うのは、年嵩の方はほとんど老人に近かったからである。

海岸はきれいに清掃されていた。津波被害の影響はどこにも見当たらず、インド洋の波に洗われていた。到着した時間が遅かったせいか、海岸は閑散としており、グラスボートのお兄さんが手持ちぶさたにしていた。結局一人でグラスボートを借り切り、海中生物観察となった。海中は見事な珊瑚礁で覆われている。熱帯特有の美しいトロピカルフィッシュが見えるかと期待したが、石鯛に似た地味な魚ばかりであった。時々1メートル以上あるウミガメが現れ、操船しているお兄さんが興奮した口調で何やら一生懸命説明してくれる。当方は船酔いが心配で聞いているどころではなかった。

コロンボまでの帰途はバスを利用した。ところがこのバスのドライバーがとんでもない飛ばし屋で、女性客が悲鳴を上げるほどである。乗り合わせた女子高生が吐き気を催して青い顔になっ



図3 線路工夫が置いた道具類。



図4 砂浜はきれいで津波の傷跡はない。

た。それでも乗客は必死に体を支えて、文句一つ言わない。どうやら、これが日常のようである。ところが案の定と言うか、途中で警察に止められて違反切符を切られてしまった。チンタカ氏(後出)によると、スリランカのバスは現地の人が赤バスと呼ぶ赤く塗られた公共バスと、白バスと呼ばれる車体が白いバスがあり、両者はライバル意識が強く、相手を見つけると猛然とスピードを上げ、抜きつ抜かれつのデッドヒートを繰り返すのだそうだ。実際、そのような場面をしばしば目にした。何でそんなに飛ばすんだ、と言うのが実感である。

5 キャンディへ

3日目、いよいよ今回の旅の目的地でもあるキャンディへ向かうことになった。キャンディはスリランカの臍とも言える位置にある高原都市である。とは言え、自力で行くわけではない。アジット氏の友人のチンタカ氏が朝8時にホテルに迎えに来る手はずになっていた。ところが9時を過ぎてもやってこない。しびれを切らして、ホテルのコンセルジュに事情を話して、ナヤナさん経由でチンタカ氏に連絡を取ってもらった。間もなくして、ナヤナさんからホテルに電話があり、今、ホテルへ向かっているが到着は11時位になるとのこと。「う～んっ」と思ったが、お陰で待っている間にボーイとすっかり仲良くなってしまった。

コロンボからキャンディ、実際は一つ手前の町ピンナワラまで車で4時間近い行程であった。これではとても朝8時に迎えに来るなど不可能である。ここでもラウナツツさんの時と同様、遅い到着を恨んだことを反省すると同時に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。後からアジットさんから聞いて分かったが、チンタカさんは日本語が話せないのも、私との同道をととても心配していたそうである。英語が通じてとても安心したそうである。と言うのも、チンタカ氏はドライブ中、私を退屈させまいと、ネットで仕入れたというジョークや、ちょっとHな小咄をしてくれたりして、本当に楽しいドライブだった。

<ピンナワラ>

キャンディに行く途中、ナヤナさんのお兄さんのラウナツツさんの家へ立ち寄った。ラウナツツさんは山口大学で電子工学の学位を取り帰国したものの職が見つからず、今は自宅で幼稚園を開いて幼児教育に国の将来をかけている。山口県が大物政治家を多数輩出していることや、松下村塾に精通しているのには驚かされた。お兄さんの家を辞してから妹のナヤナさんの家に向かった。ご主人のアジット氏は日本で働いており、その留守を守って、二人の子どもの世話をしながら自宅で日本語を教えて家計を支えている。アジットさんがいないので、水道やガス器具が壊れ放しになっているとこぼしていた。それでも、到着した時には手料理や手作りのクッキーでもてなしてくれた。私が今晚の宿を決めてないことを知って、盛んに泊まることを勧めたがそうもいかない。チンタカさんをお願いして宿を探してもらうことにした。キャンディで宿を取るつもりでいたが、キャンディまではまだかなりあるとのこと。チンタカ氏も疲れているので無理は言えない。チンタカ氏の発案で、アジット氏の家から小一時間の所に観光スポットとして有名な象の孤児院があり、そこに宿泊施設があると言うことで、そこで泊まることにした。この話を聞いていた子ども達が、自分たちも象を見に行きたいとだだをこねたのには困った。この宿泊施設は、孤児院を維持していくための収益活動の一環として運営されている。宿泊の手続きは全てチンタカ氏がしてくれた。夜中に蚊に刺されて目が覚めた。蚊の進入経路を確かめようとカーテンを開けたら窓ガラスが破損したままになっていた。やむなくベッドの支柱を利用して、シーツを蚊帳代わりに、ベッドを覆うように張って寝たが、刺されたところが痒くてほとんど寝られなかった。翌朝、孤児院の経営するレストランで朝食を取った。チンタカ氏から教えられた時間になると、何処にいたのか観光客が集まってきた。象の水浴びの時間である。近くの川まで水浴びに行く象の行列が見えるのだ。象が道路を横断する間交通渋滞が発生し、警察官による交通整理が始まった。

チンタカ氏が約束より30分ほど遅れてやってきた。チンタカ氏の住まいはキャンディ市内だそ



図5 ラウナツツさんとチンタカ氏。室内が教室。



図6 ナヤナさんと子ども達。



図7 二階が宿泊、下が土産物店になっている。



図8 水浴びに向かう象の群れ。

うだが、ここからキャンディまではまだ数十キロ有り、当然のことだと後で分かった。チンタカ氏がよく眠れたかと聞くので、I have a good slept, thank you と答えたものの眠かった。

6 今度こそキャンディへ

いよいよ今回の旅の目的地であるキャンディに向かうことになった。ガイドブックに拠れば、キャンディの街は標高300m程のなだらかな山々に囲まれた盆地にあり、周囲の山々が敵の侵入を阻み、イギリスによって滅ぼされるまま三百年以上にわたってシンハラ文化の花を咲かせた「スリランカでもっともスリランカらしい街」と言うことになっている(イエローブック09~10年版)。旅の目的は観光ではない。この地にある、スリランカを代表する最古の名門大学ペラデニヤ大学(University of Peradeniya)を訪問することである。ここでの訪問はコロombo大学での失敗のような心配はない。アジット氏を介して事前にアポを取っていたからである。ここには山口大学で電子工学の学位を取り、学科長を務めるロボット工学が専門のプラサンナ教授がおられ、約束が取ってあったからである。

<仏歯寺訪問>

博士の都合が、夕方の方が良いと言うことであった。取りあえずアジット氏から聞いていた世界遺産の仏歯寺を訪ねることにした。ガイドブックにも「ここを訪れずにスリランカは語れない」とある名刹である。故事来歴はおくとして、キャンディ湖のほとりに建つこの寺の建築様式と建築技術の高さには驚かされる。石材と木材を巧みに使い分けて、これ程細密で精巧な建築物を作り上げる民族が数百年も前に存在したこと自体に驚かされる。デザイン、建築技術、土木技術、何を取ってみても、どうやって成し遂げたのか、畏れ入るしかない。ある種の感動を覚えた。同時に、この寺がシンハラ人とタミル人の紛争の種にもなり、テロ攻撃の対象とされ、1970年代に寺の一部が爆撃・破壊されたことを知って、人間の愚かさや宗教の何たるかを考えさせられた。こ

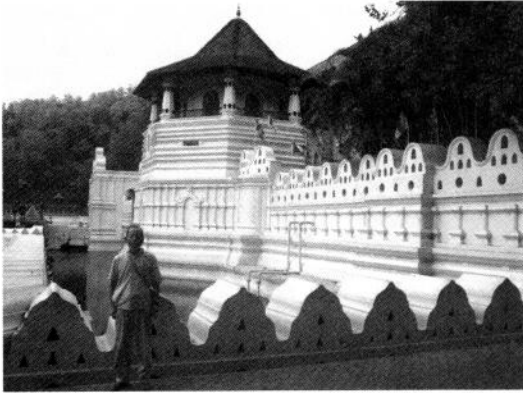


図9 仏歯寺。外観と内部はまったく様子が違う。

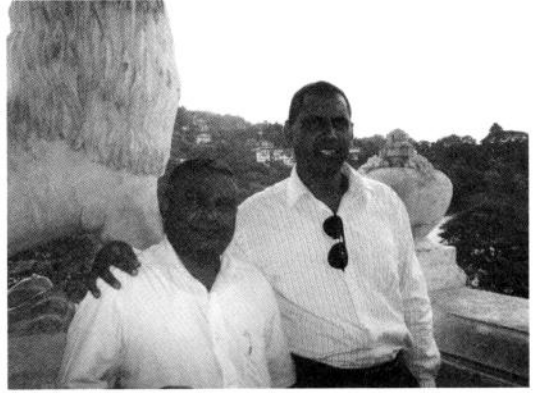


図10 チンタカ氏と案内人の幼なじみ。

の寺のガイド役をチンタカ氏の幼なじみが勤めている。役得というか、有り難いというか、一般人では見学できない施設を見せてもらうことができた。図10は、秘密の通路？から、博物館のバルコニーに出て撮ったものである。

＜ペラデニヤ大学訪問＞

ペラデニヤ大学は街の中心から車で15分ほど離れたところにある。法、文、工、農、医の5学部を有するこの大学は、スリランカのトップエリートを育てる最難関大学である。大学に着くと、プラサンナ教授が工学部の玄関前で出迎えてくれた。私が訪れたときは時間も遅かったのと、学期末試験のため学生はほとんどいなかった。工学部のほとんど全ての施設を案内してくれた。案内中に、私が珍しい器材を見つけて関心を示すと自ら操作して見せてくれたりもした。おしなべて、使われている実験や実習用の機器・器材・器具はかなり年代物であった。教材等は手作りで非常に精巧にできていると同時に、理屈や原理が分かりやすく工夫してあり感心させられた。お金はなくとも、工夫次第で教育はできるものだと再認識させられるものが多かった。一通り見るのに2時間近くかかった。工学部の施設を見終わると、外に出てキャンパスに散在する様々な施設を案内してくれた。見学の途中、コリドールで、三人連れで、急ぎ足でやってくるニマル教授に出会った。ただし、これは後で分かったことである。岐阜大学で電子工学の学位を取ったニマル教授のことについては、アジット氏から聞いて知っていた。が、まさかこんな形で遭遇するとは思ってもいなかった。人なつっこい笑顔を向けてくれるなどは思いながら、声を掛けることができなかった。たぶん、ニマル教授も、プラサンナ教授と歩いている私を見て、ひょっとするとアジット氏から聞いていた Mr. OWAKI ではないかと思ったのではないかと。この話は長くなるが、ニマル教授には、アジット氏には足を向けて寝れないほどの恩義があそうで、私の訪問に際して、アジット氏からニマル教授には連絡が行っており、よろしく言っていることが後で分かったのである。そんなことなら、もっと早く知らせておいてくれれば良かったのにと、アジット氏

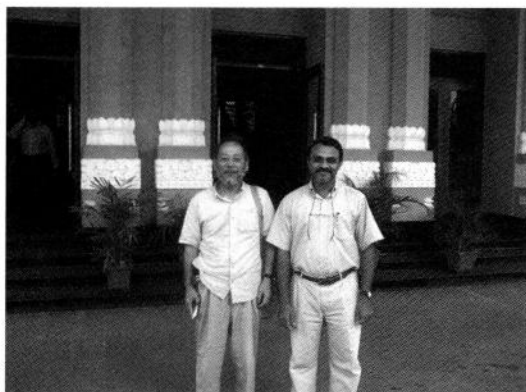


図11 工学部の玄関先で、プラサナ教授と。



図12 ジャイロを操作するプラサナ教授。

を恨んだことである。

見学の話に戻そう。ある建物の二階から見た遠くの全景がすべて農学部の演習林と聞いて驚いた。もっと他の部門も案内しようかと言われたが、時間も遅かったし、先生の顔を見ると、連日の研究の疲れからか目の下に隈（くま）ができており、とてもお願いできる状況ではなかった。それに私も少々寝不足と旅の疲れもあり丁重にお礼を述べてお断りした。夕食をご一緒しませんかと誘ったら、今日はお父さんの誕生日で家族で食事することになっているとのこと。そんな大事な日に、これ程の時間を割いて下さった先生に改めて感謝した。面識もない、見ず知らずの私のために嫌な顔一つせず、これ程熱心に案内してくれる先生が扱って立つ価値観や人間性に敬服せざるを得なかった。

<世界遺産に泊まる>

洗濯物がたまっていた。どうしても着替えがしたかった。どんな長旅でも下着類は3日分しか持たない。私はキャンデイでの宿を決めていなかった。そのことを伝えて、リーズナブルな宿を探してもらうことにした。チンタカ氏は勿論、プラサナ教授までが一緒になって、ランドリーサービスやホテルに当たってくれた。週末はランドリーサービスは勿論、どのホテルもランドリーが利用できないことが分かった。私は仏歯寺の対面にある、世界遺産になっているクイーンズホテル (Queen's Hotel) に泊まることを提案した。二人とも高いからよせと言って反対した。しかし、前出のガイドブックに拠ればエアコンなしでUS\$40である。コロンボで二泊したグランドオリエンタルホテル (Grand Oriental Hotel) はUS\$50であった。私は、高級ホテルが客のかなりの無理をきいてくれることを知っていたので、ここに賭けることにした。予約がないのが心配だが、そこは当たって砕けろである。案ずるより産むが易しだった。何の問題もなく宿泊できることになった。後はボーイとの交渉である。部屋付のボーイにランドリーサービスを頼むと、案の定、今日はランドリーサービスをやっていないと言う。そこを何とか、とお願いしてもダメ



図13 丸い金属板がルームキー。



図14 室内は広く天井は高くエアコンは不要だ。

である。できなければ、それでも良いからと20ドル札を渡して、無理やりロンドリーを押しつけた。翌朝にはロンドリーが綺麗にアイロン掛けされて帰ってきた。このホテルの創業は1837年である。明治元年が1868であることを考えると、相当古い。元号が江戸から明治に変わる30年も前である。ホテルの内部はまるで迷宮である。中にいると自分が何処にいるのか、何階にいるのかさっぱり分からなくなる。いくつもの客室を、複雑で長い廊下で繋いでいるのに加えて、敷地が傾斜地であるためか、階段が適当に組み合わせられていて、何階にいるのか混乱してしまうのだ。外出の度に、外に出る時も外出から帰って自室に戻る時も、ただの一度も迷わずに済ますことができなかった。室内は実に広く、天井も高く、エアコンはまったく不要であった。

7 紅茶畑訪問

翌朝、9:30時にチンタカ氏がホテルのロビーにやってきた。今日は、キャンディ最後の日。紅茶畑を見に行く日である。勿論、チンタカさんの運転である。観光にはほとんど興味のない私だが、スリランカ（セイロン）のキャンディに来て紅茶畑を見ないのは、エジプト（カイロ）へ行ってピラミッドを見ないのに等しいと思うので、紅茶畑見学だけは旅の目的に入れていた。ところがこの紅茶畑見学が思った以上に大変な行程であった。

私は、次男が静岡の大学に在籍していたので、静岡の茶畑はよく知っている（つもり）。キャンディの茶畑もそれに毛が生えた程度くらいに思っていた。ところがスケールがまるで違うところか、まず、キャンディ市内からのアクセスが大変である。前出のガイドブックにはそんなことはみじんも書いてない。ガイドブックに拠れば、「スリランカ島の中央部一帯は標高1000mを越す山々が連なっており、熱帯にありながら気候も温暖、また豊富な水源にも恵まれ、英国植民地時代に紅茶のプランテーションとして開発された」となっている。地形と気候に関する記述はまったくその通りであった。コロンボ市内はほぼ海面である。スリランカのような小さな島で、中央部が1000mを越えると言うことは、紅茶畑のある地形は極めて急峻だと言うことである。それよ



図15 みんな谷底を見下げている。

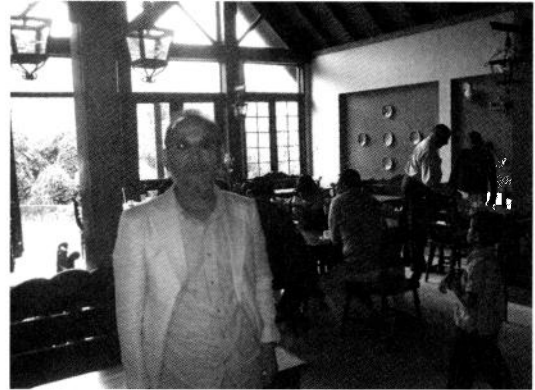


図16 紅茶メーカーの店舗で。

りも何よりも、キャンディ市内からかなり距離があり、想定外に時間がかかったことである。このことが、帰りの行程でとんでもない事態を引き起こすことになる。

インドを植民地化し、アッサム地方でお茶の栽培に成功した英国は、スリランカ（セイロン）のこの地域の気候に目を付けた。まさに二匹目のドジョウである。建設機材が使えないこの辺境の地に、現地の住民を総動員して道無き道を切り開き、山の植生を一変してしまったのだ。いったん転げ落ちたら停まりようもない急斜面に、お茶の大プランテーションを出現させたのである。今でこそ、観光名所になり車で行けるものの、その道程は事故多発道路でもあるのだ。出かけるときは晴れていた天気も進むにつれて怪しくなり、到着する頃には雨が降り出したてきた。ガイドブックにある通り、急峻な山肌を鮮烈な水が駆け下りてくる。まさに奇景というか、圧巻である。車の終着地にある紅茶メーカーの経営する店舗で飲んだお茶の味は格別であった。旅に出てもほとんどお土産物を買わない私も、Mackwoodsの200g入りパッケージを3箱も買ってしまった。広大な紅茶畑を見ながら、チンタカ氏に、紅茶畑ができてスリランカの人々の生活は少しは楽になったのかと訊いたら、これらの畑の全てが有名紅茶メーカーの所有地であり、紅茶に係わるほとんど全ての権益がそうした外国資本に握られており、スリランカの人々には恩恵らしいことは何一つないとのことだった。

帰りの段になった。今日が、キャンディの最終日であることは先に述べた。今日の夜には、コロンボに戻る予定である。昨日、チンタカ氏と二人でキャンディ駅でコロンボ行きの特急券（特急券）を購入しておいていた。勿論、チンタカ氏とは駅でお別れすることになる。汽車の出発時刻は15:00である。したがって、それまでにキャンディ（駅）まで戻らなければならない。チンタカ氏は私の帰りの汽車の時間を知っているし、何度も訪れたことのある茶畑のはずだから、時間配分も考えていると思うが、雨も降ってきて、時間がどんどん過ぎていくのに、チンタカ氏はなかなか腰を上げない。こちらは帰りのことが気になって気が気でない。

駅まで300メートル位のところでまで来たところで、大渋滞に巻き込まれてしまった。小雨が

降っている。何事かと思えば、どうやら地方選挙の投票日のようである。まるでお祭り騒ぎだ。有権者が車で投票所に向かうため道路は大混乱に陥っている。汽車の出発まで10分を切った。チンタカ氏が、走ろう、と言って車を脇に寄せると、私の鞆を抱えて走り出した。悪いことに上り坂である。私は、チンタカ氏の気持ちを考えて、まるで映画のシーンだね、二人はヒーロー役だ、とジョークを飛ばしたが、心臓はパンク寸前である。足がもつれそうになりながら駅に転がり込んだ。私は思わずチンタカ氏に抱きついた。お礼と別れの言葉もそこそこに、ホームに飛び込んだ。

8 キャンディからコロombo

私は旅に出たらなるべくその土地の代表的な交通機関を利用するよう努めている。スリランカの足は何と言ってもスリーウィーラーとバスと汽車である。キャンディからコロomboまで汽車の旅をしてみて、イギリスがかって大英帝国として世界に君臨した時代は、凄い時代だったとつくづく思う。難攻不落、断崖絶壁、天然の要塞そのままの地形に橋を架け、トンネルを穿って鉄道を敷く、よくもまあ建設したものだと思える気がする。功罪はあるにせよ、これだけのインフラを残したのは感嘆に値する。建設の裏には現地民人の苦難の歴史があっただろうと想像されるが、それにしても凄いことだと思う。スリランカは、鉄道王国でもある英国の植民地であっただけに、小さな島にしては鉄道網が発達している。スリランカの鉄道の運行システムには大英帝国時代を彷彿とさせるものがあり、駅の設定にも鉄道にも、もう日本ではお目にかかれないような旧式のものが見られる。鉄道ファンにはたまらないだろうと思った。

私が乗った汽車はコロombo直行の急行便である。発車間際に到着したので、どれが私の乗る車両かわからない。チケットを見せて他の乗客に訊くと、一番前、つまり一番後の先頭の車両だという。息せき切って駆けていく。もう足が動かない。乗り込む前に、確認するため、もう一度乗客に訊く。すると、一番先頭の車両、つまり先ほどの先頭車両だと言う。もう時間がない。必死の思いで反対側に向かって走る。もはやなるようにしかならない。意を決して乗り込んだ車両

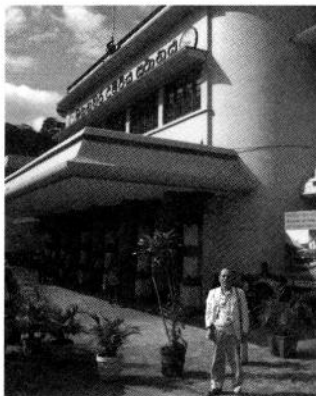


図17 キャンディ駅。



図18 隣り合わせになったお婆ちゃんと孫。

が正解であったのは幸いであった。コロombo駅に着いた時には六時を回っていたので、3時間半ほどの所要時間ではなかったかと思う。車内では、若いカップルなどと写真の撮りっこなどをして、とても楽し汽車の旅であった。しかし、車窓に展開する風景のほうがるかに素晴らしいというか、興味をそそるものであった。

9 ふたたびコロombo市内

キャンディからコロomboに戻った私は、駅前でスリーウィーラーを拾って初日に投宿したホテルに向かった。ホテルに着いたのは夜7時を回っていたと思う。ドライバーに明朝8時にホテルの前で待っているように伝えて別れた。顔見知りになったボーイがにこにこして近づいてきた。急に、何だか家に戻ってきたような安堵感をおぼえた。

翌朝、ホテルを一步出ると、約束通り昨日のドライバーがホテルの前で待っていた。スリランカに到着した初日に雇ったドライバーとは打って変わって、プロレスラー並みの体格をしたインド系の大男である。朝食をドライバーと一緒に摂った後、コロombo大学に再挑戦することにした。何としてもキャンパスの中を見てみたかった。前回と違って、守衛がインド系だったせいか、ドライバーに交渉させたら中へ入れてくれた。何と云うことだ。意を強くした私はオフィスと思われる二階建ての建物の中へ入った。何も無い。おずおずと二階に上がっていく。すると事務室があり、妙齢の女性が椅子に座って事務を執っていた。来意を告げると、教授とおぼしき紳士がやってきた。キャンパス内を見学させて欲しい旨伝えと、アボがなければダメだという。ペラデニヤ大学での件を話して、食い下がってもイエスがもらえない。やむなく、一緒に写真を撮らせて欲しいと申し出たら、これも断られた。それじゃ、彼女と撮らせて欲しいと言ったら、彼女と交渉しなさいという。そこで、彼女にその旨申し込むと、これも断られてしまった。あなたは美しくて良い対象 (good subject) だから、ぜひ記念に撮らせて欲しいと食い下がったがダメだった。たぶん、上司が撮らないものを部下の自分が撮る訳にはいかなかったのではないかと思う。心残



図19 コロombo大学の学生通用門。



図20 入場を許可してくれた守衛さんと。

りである。

<市内巡り>

飛行機の出発時間は深夜（翌日の01：40）である。今日がスリランカ最後の日である。私はドライバーの機嫌を取りながら市内を走り回った。施設の名前を忘れたが、国立の競技場か独立記念施設のような所に行った。と言うより、ドライバーが勝手に連れて行ったのだが、女子高生が修学旅行でやってきていた。私はコミュニケーションのツールとしてポラロイドカメラを持ちあっている。それで女子高生を撮っていたら、たまたま居合わせた若い兵士が記念に撮って欲しい（写真が欲しい）と寄ってきた。喜んで、撮ってやった。すると、今度は女子学生を引率してきた先生が近づいてきて、彼女たちを記念に撮ってやって欲しいと言う。こちらは願ったり叶ったりである。いずれも、ご覧の通りの美人なものには驚く（図21）。



図21 美人揃いの女子高生と、ご満悦の私。



図22 ジャワルダナ像の前で、近所の子どもと。

続いて訪れたのが左の立像である（図22）。訪れたのではなく、闇雲に市内を走っていたたまたま発見したのである。リキシャの運転手は、私に、こんなことに興味があるとは知らずに、すんでの所で通り過ぎるところだった。これには、たぶん、運転手がインド人（タミル系）であったことも関係している。タミル系の人にとっては、余り関係のないことだからである。それはともかく、私は、偉人や歴史に興味があるので、旅先でこのような銅像を見つけると、なるべき立ち寄って、その人物の功績を記した銘板を読むことにしている。ここでも像の足下の銘板に書かれている内容を見て驚いた。これが、あのジャワルダナ大統領なのかと思った。名前と親日家の大統領だと言うことは知っていた。これは、ここでのわか親善大使としての役割を果たさなければと思い、近所で遊んでいた子ども達を呼んで写真を撮った。私は帰国後、ジャワルダナについて調べてみて、大いに感動すると共に、こんな人がスリランカにいたのかと非常に驚いた。前出のイエローブックを改めて見てみたら、次のような記載があった。以下引用。



図23 道の両側にバイクのパーツ店が並ぶ。

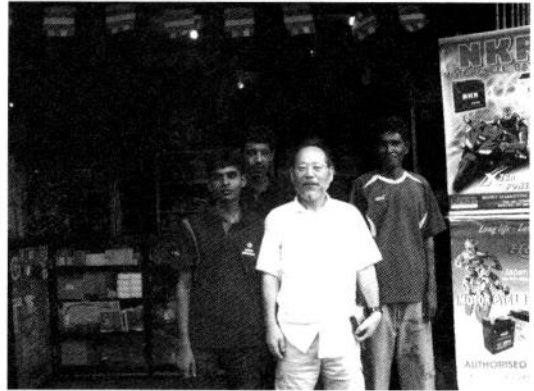


図24 ヤマハの代理店のバイクショップ。

大の親日家と言われるが、日本に対して次のように述べている。「日本、日本人がなぜ好きかという、西欧に対して独自の存在を示しているからだ、それに仏教国。実際、サンフランシスコ講和条約締結後、日本はスリランカを本当によく助けてくれた」。引用終わり。

スリランカを旅してみると、親日の国だと実感することが多い。私が出会った人達が、見ず知らずの私に対しても、どうして、と思うほど親切にしてくれるのはこうした背景があればこそではないか。政治・外交・国際援助、そして傑出した政治家のポリシーや行動が国民性となってその国の人々の心情や生き方に反映しているのではないか。

たまたま雇ったスリーウィーラーの運転手が屈強な男であることが幸いして、私は恐いもの知らずになっていた。「右に回れ」、「左に回れ」、「この路地に入れ」と目まぐるしくコロンボ市中を走り回った。勿論、私の興味は車関係だとは伝えておいた。バイクの秋葉原といった通り（図23）に連れって行ってくれた。残念ながら当日（9月11日）は日曜日であったため、ほとんどの店が閉まっていた。ヤマハの代理店の看板を掲げている店を見つけて飛び込んだ（図24）。後列右奥がオーナーのジャカットさんである。話しかけたら日本語で応じた。訊くと静岡のヤマハのトレーニングセンターで教育を受けたという。ヤマハの教育の良さなのか、私に敬語を使い、とても真摯的な対応に驚いた。彼と話していて、私は、本学にもバイク教育でのチャンスがあると感じた。ただし、実践的な教育を提供することが条件である。

今日でスリランカとはお別れだと思うと、できるだけ多くの物を見たいと思う。今日が日曜日であることも忘れて、市内のテクニカルカレッジを訪れた（図25）。ここでは、スリランカの工芸品をはじめとして、工学関係のエンジニア教育など、大学に進学できなかった人達に職業教育をしている。時計も四時を回っていたが、市の中心部からはかなり離れたところにあるケラニヤ大学（University of Kelaniya-Sri Lanka）を訪れた。雨が降りだしてきていた。足早に校門めがけて坂道を上がっていく女子大生を呼び止めて写真に収めてもらった（図26）。経営学部や商学部の学生であった。今日は日曜で講義はお休みではないのかと訊いたら、補習授業を受けていると



図25 テクニカルカレッジの前で。

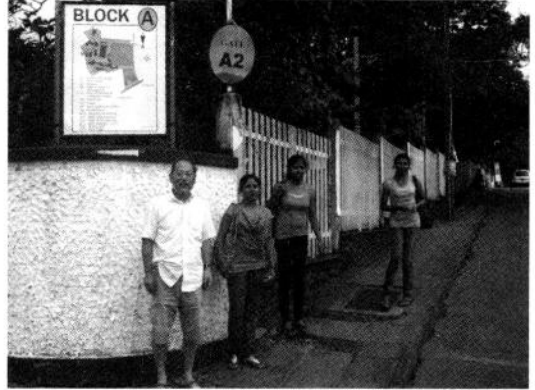


図26 ケラニヤ大学の女子大生と。

のこと。

10 ありがとうスリランカ

ケラニヤ大学からホテルに戻ったのは6時近かった。図27は、私のドライバー（LOKA LAN さん）が雨天用のカバーを収納しているところである。ドライバーとの付き合いはまだまだ続く。なにせ、飛行機の時間まで、かなりの時間がある。案内中に彼のサンダルの底が剥がれてしまったので、サンダルをプレゼントすることにした。履物店に行って、彼に好きなサンダルを選ばせたら、40\$近くした。実は、私も像の孤児院の売店で像革のサンダルを買っていた。スリランカを旅するにはサンダルが必需品だと気づいたからである。このサンダルが実に具合良くできている。その後の写真を見ると、靴とサンダルを使い分けているのが分かる。

私が夕食に中華料理を食べたいということで、中華料理のレストランを探し回った。何せ、彼はインド系なので、中華料理の店をまったく知らないらしい。人に訊いたりしながら探し回った。



図27 雨よけのカバーを収納する LokaLan さん



図28 空港に向かう途中のGSでみたプリウス。

た。教えられた店を訪ねても、高級すぎたり、雰囲気が入らなかつたりして、結局4軒目ではようやく落ち着いた。彼と一緒に食べようといくら勧めても断られた。やむなく、一人で食べることにした。私としては時間つぶしをしなければならない。空港までの所要時間と、夜間でのことも考慮して、安全を見込んで8時にここ（レストラン）まで迎えに来るように約束して別れた。

約束の時間通りにドライバーがやってきた。図28は空港へ向かう途中、トイレ休憩で立ち寄ったGSで見たプリウスである。チンタカ氏によると現在700台位のプリウスが走っているそうだ。ラウナッツさん（ナヤナさんの兄）の家を訪問した時の話の中で書けば良かったが、実はこの時プリウスが話題になり、三人で小一時間ほどプリウスについて熱い議論をすることになった。坂道の多いスリランカでの燃費が問題になったのだ。スリランカは、島中を網の目のように道路が通っていて、チンタカ氏など、ビジネスマンは年間の走行距離が相当なものになるそうだ。ガソリンとコーヒーの値段は日本とそんなに変わらないとのことで、車の燃費は一大関心事だとのこと。三人では意見がまとまらず、とうとうチンタカ氏が、それじゃプリウスに乗っている友人に電話して訊いてみようと言う話にまで発展した。途中、要所、要所で、機関銃を携えた兵士にあったが物々しい感じはまったくしなかった。

空港に着いたのは10時を回っていたと思う。ドライバーにこれまでの料金を精算したが、さらに100ドル欲しいと言う。私は所持金が少なくなっていたし、米ドルを残しておきたかったので、サンダルや食事代（朝食や昼食代を私が払っていた）のことや、今度来たらまた雇うから等と話して、納得してもらった。到着したところは空港の裏口ならぬ勝手口のような場所であった。周囲も暗く、とても出国の手続きをするような雰囲気の場所ではない。まったく要領がつかめず焦ってしまった。時間に余裕を見ておいて正解であった。

11 提 案

滞在中、スリランカの足とも言えるスリーウィーラが70万台を越え、排気規制で2ストロークエンジンが徐々に使用禁止になると知って、ペラデニヤ大学と本学による電動スリーウィーラの共同開発を思いついた。ペラデニヤ大学には、先に述べたようにロボット工学専攻で学科長のプラサンナ教授や、岐阜大学で電子工学の学位を取得したニマル教授（Dr. Nimal Rathrayare）、岐阜大学医学部で学び現在厚生副大臣を務めているスニル教授（Dr. Sunil Abeyrathana）、それにナヤナさんのお兄さんのラウナッツさ氏（山口大学で学位取得：電子工学）がいるではないか。それに、私を案内してくれたチンタカ氏は元船用機関のエンジニアで、現在機械部品関係のビジネスをしている。残念ながら、このプランを思いついたのがスリランカを立つ直前だったので、彼等の誰ともこの件の実行可能性（フィジビリティ・スタディ：feasibility study）について議論できなかった。スリーウィーラの電動化の鍵は低コストで、いかに軽量に作るができるかである。私は本学の車体整備の製作技術をもってすれば可能性があると思う。車体を本学が担当し、制御部門をペラデニヤ大学が担当することにしてはどうか。関係者においてぜひ検討して

もらいたい。

12 あ と が き

スリランカの現在は、市内の要所に検問所があり機関銃を携えた兵士が立っているものの、まったくと言って良いほど平穏で安全な国である。本文でも触れたように、戦後処理がうまくいったことに加えて、JICA（国際協力事業団）をはじめとした日本の国際援助もうまく浸透している。特に最近では2008年のインド洋大津波、震源はインドネシアのアチェ近海、に対する日本からの援助のこともあり、日本および日本人に対してとても親近感のある国である。私は、東南アジアを旅してみて、国際援助が様々な問題を内包していることを承知している。しかし、それでも、やはり国際貢献・援助は重要だとつくづく思う。また、想像以上の数の留学生がこの国から来ている理由も頷ける気がした。留学生に、投資に見合った実力を付けて卒業させる教育プログラムを提供できれば、さらに入学希望者が増えるのではないかと思う。

紙幅が尽きてきてしまった。スリランカの旅の思いでは、とてもここに書き尽くせないほどいっぱいある。機会があればまた続編を書くことにしてひとまず筆をおく。

旅の追補—バンコク事情

スリランカからの帰国の途次、バンコクに立ち寄った。本学OBのスラスリー氏に会うためである。私の友人が人材派遣の会社を経営しており、タイ国に関心を示していたので、その方面の情報収集も目的の一つであった。スラスリー氏の案内でバンコク市内の日本語学校を訪問した。三階建ての建物の1階から3階まで使って、40名ほどの学生を教えている。学生の年齢は18歳から32歳までと広い。学生のほとんどが東北地方の貧しい農家の出身者である。スラスリー氏を介して来意を告げると、先生が、居合わせた生徒一人一人に日本語で自己紹介させた。発音がしっかりしていて驚いた。日本語教育は、ちゃんとした資格を持つ女性教師が担当していた。学生の



図29 学生達は、本当によく勉強する。



図30 事務員のチャさんと。



図31 郊外の工業団地。タイ・トヨタ工場。



図32 スラスリー氏のお嬢さんと大学構内で。

評判は高く、日本企業から多くの求人があるとのこと。続いてバンコク市内の工業団地を訪れた(図31)。時間がないので、スラスリーさんに無理をお願いして精力的に見て回った。私の訪問直後に、バンコクが大洪水に見舞われることになった。幸いこの団地は今般の洪水による被災はなかった。しかし、訪問したタイ・トヨタの工場は部品の供給が途絶え、操業停止に追い込まれた。

スラスリー氏のお嬢さんが、カセサート大学の農学部に在籍しているので、待ち合わせて大学を案内してもらった(図32)。この大学は1943年にタイ国最初の農科大学として創立された名門である。彼女は日本語を勉強中で、私の英語よりよく通じるのには感心した。10月から研修で東大や東京農大を訪問する予定とのことであった。

バンコクを発つ日、市内のレストランでスラスリー氏とお嬢さんの三人で夕食を楽しんだ。その席で、彼女がお小遣い稼ぎのために、ネットビジネスで靴の販売をしている話になった。私にぜひ靴のプレゼントしたいと言う。彼氏に持ってこさせることになり、そろそろ到着する頃を見計らって通りに出て待っていると、にわかにも雨が降り出した。みるみる水かさが増していく。ほんの数分のうちにタイヤが水に浸かってしまうほど冠水して、渋滞が始まった。何という水捌けの悪い都市なんだと思った。そんな訳で、空港までの道は雨で、間に合うかどうか心配しながらのドライブとなった。

後 記

今般のバンコクの洪水被害を知るにつけ、バンコクの水捌けの悪さが実感として思い出される。被害が心配でスラスリー氏とは連絡をとっている。最初の頃は「先生、大丈夫、問題ない」と言っていたが、実は、娘さんが訪日中に家が浸水してしまった。現在ボーイスカウトが使用する施設で避難生活を送っている。私が訪れた工業団地のトヨタ工場は、新聞報道((11月22日付、日経)に拠れば、部品調達の目途が立って11月21日から操業を再開した。

津波による被害を見たくて訪れたスリランカのヒッカドゥワ(正しくはヒッカドゥワの一つ手

前のアンバラゴダ村)に関する記事が岐阜新聞(11月23日付：日本を創る③復興への道－海外の被災地)に掲載された。この特集は、東日本の被災地の人達に少しでも参考になればと、海外の被災地を取り上げて紹介する記事である。私は、汽車の車窓からこの村を見たことになる。この村に津波写真博物館があることを、この記事で知った。

本学OBであるアジット氏の実家はかなりの旧家である。ナヤナさんの話では、昔は大地主で裕福な暮らしをしていたそうだ。居間には、セピア色した、象を何頭も従えたアジット家の人々の写真が飾ってある。それが、アジット氏のお兄さんが、お金ほしさに、小作人に土地を売ってしまったらしい。小作人から開放された人からは今でも感謝されており、幹線道路からの間道には、アジット家の名が冠せられている。ナヤナさんが留守を守るアジット家(旧家ではない)は、椰子の木に囲まれたびっくりするほどの大邸宅である。ここで私が言いたいのは、タイのスラスリー氏にしろ、スリランカのアジット氏にしろ、人脈も行動範囲も非常に広い人である。こうした人材を有効に活用することこそ、本学発展の鍵ではないか、とすることである。調べると、まだまだ貴重で得難い人材がOBの中にも、在学生の中にも存在するはずである。地域性、国際性、独自性を以て、本学の進むべき道とするなら、こうした貴重な人材を、本学発展のために有効に活用することを考えるべきではないか。